

吉雄永純と合田大介の『紅毛外科聞書』の 解題と翻刻

板野 俊文

香川大学

はじめに

本稿では、江戸中期の讃岐の医家であった合田大介の著した『紅毛外科聞書』¹⁾について述べる。

本論に入る前にほとんど知られていない合田大介の略歴について述べる。これは、大介の長男である合田時蔵の表した『蘭齋先生行状』²⁾による。

元文三年(1738)生まれ、寛政七年(1795)三月 死亡 58才。(長兄である合田強(通称 求吾)は、蘭学を紹介した人物として、知られている³⁻⁵⁾。宝暦五年(1755)18才の時に、長崎遊学。阿蘭陀大通詞である耕牛吉雄永章⁶⁾(1724~1800)と、その弟の蘆風吉雄永純⁷⁾(1725~1777)主催の成秀館で二年間学んだ。しかし兄の強は未だその学習が充分でないとしてその後数回大介を長崎に送り出して勉学を続けさせた。宝暦十一年に帰郷(24才)したが、すぐに京都松原敬輔(二代目一閑齋)の元で二年間修業し、古医方を学ぶ。後に分家開業(増屋合田家)したという。長兄の強が享保八年(1723)生まれであるので、強とは15歳違いの弟ということになる。これは次男が夭折したことによる。大介は、若くして和蘭語を学んだことから、その読み書きが優秀で、蘆風の死ぬ前の遺言で遣り残した外科本の翻訳を大介に依頼したという逸話がある²⁾。

寛政七年(1795)三月 死亡 58才。

管見によれば、本稿の書については現在まで報告がない。また、吉雄蘆風の譯本というのも刊行されていない。附録1として掲載するが、阿蘭陀流水薬、油薬、膏薬に就いての写本は、全国の成秀館で講義を受けた人々が講義録として持ち帰り残っているが、それ以外はない。この見地からす

れば、吉雄流外科術の一端を示すものとして、重要であると考ええる。

凡例

- 一 この書は吉雄蘆風の講義録である合田大介の『紅毛外術聞書』である。
- 一 今回、翻刻したのは香川県立ミュージアムに所蔵されている原本である。
- 一 本文は漢字とカタカナで書かれているのでそのままの形で翻刻した。
- 一 翻刻中で、筆者の注は()を用いて書いている。
- 一 虫食いの部分は■を用いて示した。これは最初の部分に多い。判読不能な文字は□を用いた。
- 一 講義録である事より、重複などがあるが、合田大介の意思を尊重し、あえて全文を翻刻した事を付記する。
- 一 原本は縦書きである。

翻刻

(表紙)

	合田	双松亭	
紅毛外科聞書	崎陽	吉雄永純	訳
	西讃	合田善興	述

痔

禁食 胡椒唐カラシ其外諸熱物ヲ忌 又トツル物ヲ忌 初発玉子ノ如ク又ハフドウノ如ク腫或痛或カユキヲ散ス

インクエントム ノテリイトム 又アメントウノ油

又燒酒ヲ温メ毛メンニ浸シ毎ニ貼ス 又蛭ヲ取腫ノ上ニ置吸スモ良也 此ハ痛強時瘀血ヲ吸取ス仕掛也 右ニテモ不散痛強腫強時ハ腫物下ノ方ヨリランセツタニテロヲ明膿血ヲ出ス也 右敗リシ跡ヘハカラメイチャヲ付蓋 毛メン四重程置巻也ランセツタニテ敗リ血ヲ取ハ痛止ル方也 カラメイチャ付ルハ膿血ヲ吸ス仕掛也 巻毛メン作様



(この図は後に解説する)

紅毛國風ニテ痔痛常ニ病ル者ハ一年ニ二度程血ヲ取ル 時節ハ春秋也 常ニ瘀血ヲ去リ生血ヲ増散薬ヲ用ル也 多湿毒家病フ 山帰来専用

干ト云コト 葉ト云コト
ミレホウリヨム 右ヲ茶ノ如煎テ常ニ服ス

常ニ道中馬ニノルコト又ハ動コト悪シ 内薬ハ冷ムル薬用テ可也 又止血瘀血ヲ去治分モ良 外科ハ腫物ヲ和シテ冷ムル者可也

又穴痔ハ嗅氣甚黄汁ヲ出シ古クナリ肛門ノグルリタ、ル、コトモアリ 右ニ三通リ有リ

肛門外ハカリ穴明タルモ有 肛門ノ内ニ穴明タルモ有 右穴ヨリ膿汁ツ、イテ出ルモアリ

外科ノ心得ハ腫物毒浅深ヲ見合サクリニテ穴ヲヨク〜サクリ見テ穴セマクレハ穴ヲ廣シテネハ科治ナラヌ故切廣ケル也 其跡ヘ水突ニテ牛ノ乳ヲシホリ温メ突入ル也 乳汁ヲ入ルハ腫物穴ノホケ様ヲ考知タメ也 腫物口カ又肛門ヨリカサクリヲ入見也 サクリ骨ナトヘ當ルハ甚六カシキ也 又指ニ油ヲヌリ肛門ヘ入腫物口ヨリハサクリヲ入サクリト指ト行逢カ不逢カヲ見ル サクリヲ餘リ深く入ヌ也 深くハ切コトハナラヌ也 陰莖旁光ナトヘサクリ入者也 女ハ子宮ヘ腐入コト有 右ノ通り深く腐入時ハ難治也

又痔漏腫上リタラハ早く科ス ヲツケレハ膿ニナル也 散ヌ時ニハ早く切敗ル也 腐リ深くナレハ治シ難シ 先科治ニカ、ル前ニハ口切ヲ能シ下剤ヲ用穢物ヲ下シ去ルヘシ 病人平生血多生付ナレハ血ヲ取ル也 内薬ハ瘀血ヲ去リ生血ヲ増科治スヘシ 又科治切明ル前ニハ肛門ヨリ突薬スル也 右突薬ハ嗅氣ヲ去リ又手ナトヨコレヌタメソウジスル仕掛也 夫ヨリ病人ヲ腹バワシ足ヲ廣ケサス 腫物口ヨリサクリノ付シ痔切ヲ入肛門ヘ引出シ引切也 若サクリ肛門ヘ出ヌ時ハ肛

門ヨリ指ヲ入サクリ當リタル所ヲ見也 指ニサクリ當ラハ指ノ先ニテサクリヲマケ引出ス也 深キハ指ヲ入ネハ出ヌ故 右ノ通りスル也 若浅クハイソ、ラカ山吹ノシンカヲヨク〜日ニ乾シサシ置也 穴廣クナル時ハ治スルモノ也 切跡ヘハカラメイチャヲサス也 血出ル故カラメイチャヲ付血ヲ吸ス也 付膏薬ハテキス、エケヒシヤコム少シ交合付ル也 上膏薬見合 跡ニハテキスハカリニテモヨシ 是ニテ肉上リ色ヨクナリ臭氣去ルタル時ハハルサムノ類付ル也 其燒酒又ア、クハカルシス付テモ可也 カラホツシニテモ良 サクリモ入又時ハランセツタニテサクリノ入ナドト切明其ヨリ痔切サクリヲ入切也 又ミソサクリ入其ヨリ切モ有 又一通り内ヘ穴ホケ外ハフクレフトウノ如クナル有 是ハフクレヨリランセツタニテ切ナリ スヘテ痔口切タルアトヘ毛メンヲ巻入ルモ有 又ホツシヲシノ巻ノ如クシテ入ルモ有 切跡血多出ル有 散薬ニテモ燒酒温テモ付ル 血ヲ止也 切タルアトホツシ入ルハバセマク四重程ニシテヲシ毛メ置也 右ノ上ヲ前ニ見エタル通りニ巻毛メンニテシツカリト差也 切タル跡ニテモ血多生レノ人ナレハ又血ヲ取ナリ 血ヲ取ハ痛スクナク成モノ也 巻毛メンハ三日目四日目位ニテ巻替見ル也 諸痔コハリ強色悪キ所ハスヘテ切取スツル也 大便ニ行前ニハホツシヲ切其跡ヲ洗テ右ノ如クスルナリ 洗薬ハ

乙切草乾テ 右煎出シテ是ニテ洗フ也 又前ノ如クシノ巻ノ如クシテ入シツカリト巻也 一タイホツシハ餘斗ニツムル也 後ニニハテキスノルイ膿ヲモタスル膏付ル也 内ニコハリアラハエケヒシヤコムカ又ヘレシヒタアトナト交合付ル也 内腐リコハリアラハ右ノ通りノインクエントム付ル肉上ハハルサムルイ付ル 悪肉又ハ嗅氣ナト去リ皮一重ニ成ハカラメイチャ可也 膿油膿ニナレハ良 黄汁ナレハ悪シ 食事専ラ謹シテ良 余計食スレハ小便大便シケキ故也 色悪クコハリツヨキハ難治也 切取ネハ治ヌモノナレハ早く切取也 穴ノ小キ所ハ廣ケネハ難治ナレハ早く切廣ケル也 痔切アトヘテヤホムホリコスヲホツシニ付肛門ヘ入ルモアリ 諸痔久敷ナレハ治セヌモノナレハ早く治ヲ施シテ良心エヘキコト也

右 痔漏科治一通也 色々口傳アリ

- 又一種 痔癰ト云有 肛門ニ節如ク出十二時ノ内コトノ外痛強赤色ニシテ熱甚気分コトノ外悪キ者也 后々ハ必口明者也 為心得書是所

附骨疽ケ 大脉梅毒ヨリ発ト云々

- 初発強痛有 針ニテサシ又驚如クコトノ外痛者ナリ 上ニ腫レ見エス 内ニテ痛者ハ宜キ方也 内薬コレノ外用土伏令劑用 専ラ発散ノ劑ヲ用 汗ヲ取コト宜 又石風呂ナトニ入 汗サスモ良 紅毛ニハ箱ニ病人ヲ入汗サス方有 日数六七日之間石風呂ニテ毎度汗サス也 右ノ如ク初発ニテサスレハ毒内ニ入コトアタハスシテ早ク治スル也 長ク土伏令劑用ユ 右ノ如クシテモ不治時ハ早ク膿セル也 底ニ膿アリト見エハ腫物下ヨリロヲ明ル也 針サシ膿出シ跡ハ ハルサムルイ用 穴深ケレハスホイトニテ洗フ也

洗薬ノ方

大根草 煎シ右汁ニ

メリロサアロム テンキテユルメラ テンキテユルアロエス

右ノ洗薬ヲ能ク交合スホイトニテ内ヲ能ク洗フ也 洗シ跡膏薬ハテンキテユルメラ 或ハテンキテユルシスクスニイ 右ヲホツシニ浸シ貼ス 右ノ腫物身内手足面何レヘ出テモ腐リ強骨出者コト一クヌキ取也 コリ一スル者ハ大骨ニ當リ骨ヌケヌ時ハ骨ニ付也 腐肉ヲ骨コサケニテヨク一コサゲ取 跡ハハルサム類貼ス メラノ如者可也 右ノ如ク治ヲ施テモ不治時ハ病人虚弱ヲ見合粉劑ヲ用ユヘシ 軽く不可用 謹テ可用也

- 身内手足何レノ所ニテモ竹ノソケ木ノソケ立痛甚ク色赤ク熱強者ハ血ヲ取 其病人ノ痛所ニ由テ血ヲ取也 腕手指ナトヘソケ立痛強キニ沢尺ヨリ血ヲ取ル 餘皆是ニ同ジ 内薬専ラ精解ノ劑ヲ用 病人強弱ヲ見治ヲ施スヘシ 又下利ノ薬ヲ用 弱者ニハ弱キ下ヲ用 強人ニハ強キ下ヲ用 食事ハ熱物ヲ忌ム 日本ニテ治ヲ施ス如ク腫物熱勢ト見ハ冷薬ヲ用 冷腫ト見ハ温劑ヲ用 人生付熱性ノ人ハ血多故ニ常ニ血ヲ取 薬ハ冷薬ヲ用 餘ノ病人モ是ニ同シ

右腫物蒸散シノ方

蜜陀僧 右ニ酢ヲ入鍋ニテ煮ツメインクエン トムノ如ク煉リ毛綿ヲ四重ニワリ二重ノ間ヘ右ノ煉ツメノロカスヲ入腫物ノ上ニ貼置 毎度カユルナリ 右ノ薬モ温テ度ニカユル也 冷テハ功ナキ者ナリ

又方 水 酢 各ホ分 塩 六錢 白硝石 一錢 右鍋ニ入温メテ用様前ニ同シ

又 牛ノ糞温リヲ其マ、酢ニ交腫物ノ上ニ貼テモ良 冷テハ是モ無功者也

又方 平生冷性ノ生付ノ人ハ 焼酒 一味

又 カンフルフラントウエンニ テリア、カ少加テ良

又 ア、クハカルシスニ カンフルフラントウエンイ加テ貼テモ良 右何レモ温リヲ用

又方 石脂 白鈆 ラアヒスカナメナアリス

サルアルモニアカ 金蜜陀

右 煉合温リタルヲ毎度用テモ可也

又方 強人ノ小便 硫黄少 サルアルモニヤアカ少

右小便ニ 二味ヲ入煎シ温リヲ付テモ良

又方 サホン十六錢 フラントウエン九十六錢

右フラントウエンニサホン入煮温リヲ用 何レノ方ニテモ用様ハ前ニ見エシ

四重毛メン^{フタ}ニ重ノ間ニ付ル仕掛宜シキナリ

- 産後二三日又五七日シテ乳汁ツモリト、コヲツテ腫物ヲナス者有 強コハリ大ニ痛者也 又婦人ニカキラス男子ニモ右ニ同シ如キ腫物有也

一身大熱□大ニシテ緊頭痛煩渴胸膈セマリナトシテ色々ノ悪症有 治是ニ近シ

先婦人ノ初発ハ乳吞子ヲウシイナトシテ乳ハリ強ク右ノ如ク腫物ヲナス 又風邪ナトニテモ右ノ如キ腫物アル也 紅毛本国ニテハ婦人ニテモ常ニ胸ヲイタシイル故風ニ當リ右ノ如キ腫物ヲナス 或産後ニ物ニ行アタリ乳ヲ打ナトシテ大ニ腫レ人ノ頭ノ如クニシテ赤色ノ者アリ 甚熱スル者アリ 強痛者アリ タン一浅深者也 去ナカラアマリ氣遣ナル腫物ニハアラス 痛強腫

高上ルハ良也 腫物根トリコハリコト也
 強ク痛スクナキヲキロウノ也 痛スクナク根ト
 リシリユススルヲキロウハカクノ如クナレハノ
 チへハカンケルニナル者也 心得テ治ヲ施ス
 ヘシ 乳腫良膏 エンプラストロム スヘル
 マシイチイ 能散膏也

○紅毛ニテ病乳腫者為如左

水銀一味 推ノカラニ様成物ニ入テ首ヘカケサ
 セ置 又脊中ヘモカケサス也
 又 テラアネス 一味 五ノ圖ヘ貼テ乳腫ヲ治ス
 又 タハコノ油 白鈷 右ニ味交合五ノ圖ヘ
 貼ス 右ノ如クスレハ乳乾腫減ス 痛強時イタ
 シテ良 人ニヨリ自ラ乳汁多出者アリ 乳腫蒸
 葉ニテ散スコトモ有 蒸葉方
 山風子花 野菊花 イノント種 小茴香
 右拵蒸様 前ニ見ユ
 又 米ヌカ 塩 右ヲカハラニテイル 温
 リヲ其マ、貼シ蒸温シテ様病人身加減能ホトニ
 温ル 平生病人風ニ當ルコトヲ忌キロウ也 又
 テヤキロン用ルコトモ有 ノテリイトムモ貼ス
 又 小茴香一味 右酢ニテ煮テ温蒸コトモ良
 又ア、クハカルシス温メ毛メンニ浸シ付ルモ有
 右何レモ毎度カユルナリ
 ア、クハカルシスハ天水ニテ作ル 乳腫ノ人乳
 汁多タマルコトヲ忌ム也 多タマリシ時ハヘン
 ドウザカ又阿蘭陀キセルナトニテ吸取也
 犬子ニ吸スコトモアリ
 右ノ通ムシ葉色々ニシテ四五日蒸テモ不散コハ
 リ強痛甚時ハ早く引上膿ス科治スヘシ
 エレフラストロムテヤキロン 又青タハコ モ
 ミ出シ付ル
 又前ニ見ヘシ膿セノ蒸葉ヲ用
 又方 大麦粉四錢又八錢 蜜見合 サフラン少
 又方 大麦粉三十二錢 玉子黄味八錢 右能々簪
 ニテ交ル
 酢二十四錢 水見合 又松脂枚脂ノ類少加ル也
 右何モ前々見ヘシ通りニ拵ヘ用ユルナリ 惣躰
 蒸葉者温リヌケテハ功ナキモノ也
 註曰 白百合根 葵根 ヒトモシ根 菊花 胡广仁

唐柳実 極油 右何レモムシ葉ニ入用ト云々

右ノ腫物ニハ常ノ食物蕎麦ヲ喰テ可也ト云
 又膿蒸葉 古酒十六錢 蜜四錢 サホン十六錢
 菊油十六錢 右鍋ニテ煮温リヲ前ノ通りニ用ユ
 右ノ通りノ膿セ蒸葉ヲ色々替蒸時ハ腫物上リ膿
 ヲモツ也 膿少ニテモ見ヘハ針ヲサシ口明ル也
 口明テハ科治餘ノ腫物同シ 口明テ敗スル方
 肉上 テキステイヒヨム ハルサムルイ何レニ
 テモ 玉子油ハルサムルイ也 少交 如右色々瘡ス 若疵深ク
 膿深ケレハ突葉ヲ用

○突葉 乙切草乾テ メリロサアロウム

右ニ味先乙切草蒸シ其汁ニメリロサア入スホイ
 トニテ洗フ也 一日ニ三度ホト洗 其跡ハ サ
 シメイチヤ用
 サシメイチヤ付葉ハテキス其外見合ノ膏ヲ用メ
 イチヤハ腫物浅深ヲ見后ニ浅クナレハメイチヤ
 ヲ短クシテ指也 一月ニ治スモアリ 又一年二
 年カ、ルモアリ 半年一年トナリ不治ハ腫スク
 ナクテモ大ジナリ 後必カンケルニナルナリ
 十四五日内外ニ膿カ散カ見ユルモノナリ 十四
 五日ヲ経テモ不、動コハリ不解ハ大ジナリ カ
 ンケルノ下シト知り能ク心ヲ付テ可見ト紅毛書
 ニ詳也

ヲ、リヨムヲホウルム

玉子 三十二テモ又四十二テモ 右 カラナガラ煮テ
 後白身ハ去リ黄味ハカリヲ取 又鍋ニ入右黄味
 油キルマテ煮夫ヨリ目細キ布ニ入油シメニテシ
 メ濾スナリ

主治痛ヲ止裏切ニ専用 焼所ノコハリスヘテ腫
 物皮ツクリアトノコハリヲ解ス 髪毛不生ニ貼
 テ毛ヲ生ス 耳痛齒痛テヲ止ム 又霜腫或寒中
 ニ當リ節々痛ニ貼テ良 金瘡ニ専ラ用テ良 是
 モハルサムルイト云 肉上ニ用ユル也

○陰囊光丸折々痛又片ヘ痛モアリ 痛難施ホト大
 ニ痛モノアリ 痛ニ二通 外ヨリ痛有 又内ヨ
 リ痛アリ 外ヨリ痛ト云ハ或打或ツメ又馬ナト
 ニノリ痛有 内ヨリ痛ハ梅毒ニテ痛也 此痛ハ
 腎ニ湿テ請故痛ナスナリ 能々此二通ヲ心ヲ付
 テ見科治スヘシ
 初発陰囊大ニ腫色赤ク熱シテ焼ル如ク光丸コハ
 リコブシノ如クフトル有 寒熱往來輕コトニア

ラズ 療治アシケレハ後疽ノ如成 至死者アリ
或農靡ト成敗ルレハ釣肉出ルコトアリ ワアト
ルフロイクシテ病人コトノホカ立居不自由ナル
モノ也

散薬ハ 初乳腫ノ散薬ニ同ジ

酢 蜜陀僧 右ネリ合セ貼ス

又方 ア、クハカルシス カンフルフラントウエン 又
唐土 又ラアヒスカナメナアリス 何レニテモ加 右ニテ温メ
タテルナリ

又テラアネスコムメリクウリヨム 又テヤキロ
ンコムへシイ

右薄クノへ貼シテ散スコトアルナリ

○内薬 ヲクリカンキリ 牡蠣コレヲ用テ良

又青貝モ用 常ニ茶ヲタノマスル良 熱物喰
コトヲ忌ム 静ニシテ寝サスコト良也

又 硝石 硫黄ヲ用テ良 血多人ハ血ヲ取コト
有

湿ニテ腫レ痛ト見ハ下劑 腹中精解スル内薬又
右二品ノ薬ニ粉ヲ加毎日用テ散者也

又方 大麦取湯々甘草ヲ入用テモ良

又 大茴香ヲ茶ノ如ク煎テ常ニ服テ可也

右之通ニテ色々方ヲ変用ユレドモ不散時ハ早
ク引上ケ膿ス療治可也 膿膏ハテヤキロンコム
へシイ専ラ用 又前ニ見シ方々ノ薬ヲ用膿ス

也 膿ナラハ心ヲ付腫物下カハへ針サス也 口
明療治常ノ通 其時ノ見合ニ治ヲ加フヘシ 腐
肉去リタラハ ハルサム類見合トレニテモ用テ
可也 又陰囊腐レ切レ皮ノク有 光丸其マ、出
ルアリ イカ様ニ腐レテモハルサムルイ可也
光丸ニ疵付時ハ大事ノコト也 可心ヲ付也

○大頭痛膿痛胸膈塞ルニハ血ヲ取ル也

血ヲ取所耳ノ後動脈所打ヨリ取也

○ハンテロウズ 一名 エレイシヘラス

先初少シ腫レ見シ 時トシテ大ニ座取色甚赤ク
熱痛キリヨテサス如ク其所赤ヲ指ニテラスニ指
アト白ク變ル 指ヲ引ハ又即チ赤ク成物也 發
所ハ多ハ顔面又ハ首腕手足其外舛中何レト不定
者也 病症惡寒惡風又大熱形傷寒初ニ同シ 紅
毛ニテ常ニ酒ヲ好 又常ニ喰物不禁人多如右病
ヲ患トアリ 紅毛ニテ平生ノ酒二品温酒冷酒ア

ルナリ 又右ノ病中ニ惡物ヲ不禁 人ハ後疽ノ
如クナル 病中モ專ラ酒ヲ忌 内薬表發又解熱
ノ薬ヲ専ラ用

山風子 甘草 右ニ味蒸テ茶ノ如ク常ニ服シ
テ良 又身冷ルコト甚惡シ 右病人乾アラハ
大麦煎テ其汁ヲ用 右ノニ味ノ薬ヲ不_レ請人
アリ 其人ニハ

牡蠣 毛蛤 ヲクリカンキリ

アコ屋貝 又 テヤホレテコム 硝石

右散ニシテ用

又 タツノ花煎シ出シモメンイ浸シ貼ス

又 テリア、カ 用テモ良 此治方前乳腫散
シ用テ良

又 散シ薬

山風子花 甘草 ^ニ胡粉 ^{セルウザ}白鉛 メラ 各ホ分
樟腦^少 右細末ニシテ如何様ニシテモ温シテ腫
ノ上ニ貼ス 冷シ貼ルコト惡シ

○註云 王乳香 四錢 白虎珀 八錢 芦會 十六錢 赤荻花
一握 右モ温テ用ユ

又 小麦粉 群青 赤荻 山風子 メラ 此類ノ物ハ何レヲ用テ良
夫故色々加テ用

又 下症ニ出レハ フスへ薬用

メラ ヲリハアノム 右ニ味 細末ノアリタリヨリ風ノ入ヌ如クシテ
火ニクベフスベルナリ 此ルイ註ニ見ユルトアリ

又方 タツノ木内青皮

右温メタル毛メンニツ、ミ腫レ赤色ノ上ニ貼
シ卷重也

此モ毎度カユル也

又 樟腦 燒肉 テリア、カ^少交 右温メモメ
ンニ浸シ貼ス 此類ニハ諸ノ油ルイヲ忌 心ヲ
付ベシ

諸寒熱ノ薬ニテモ温メ付ルヲ良トス 冷物ヲ用
ユレハ奏理ヲフサク故キロウ也 見合尺沢ヨリ
血ヲ取 平生ハ下スコトヲ忌 大便□スレハ下
ス

又 散シ冷ムルニ ホリコス 金蜜陀ヲ用 又
セルウサモ交合用 下劑ヲ用テ可也

○ブルウトヒンネン 一名 ヒュリユンキウリユス 本名也

前ニ見ヘシ腫ヨリ細クシテ強リハツヨリ皮肉ノ
間ノコト也 大ニ痛赤ク熱強ク痛所定ラサルモ
ノ也 初瘡トリセマケレドモ後ハ廣ク走リマハ

ルモノ也 夜ル寝ル時分ニコトノ外痛者也 常ニ血氣盛成人小兒ニアリ 多其年生レノ小兒ニ有者也 シカシ餘リ驚キ恐ル、腫レニ非ス 心遣ハ多ハナシ 小兒ニアリテハ痛強ナキサケビ是ヨリシテ驚風癲癩ニナルコト有

初発ハ前ニ同シ 血熱ヨリ為ス 内薬血ノ順還スル薬ヲ用テ良 然レドモ内医ノアヅカル所ハスクナク外治専也 下剤ヲ用 強人ニハ血ヲ取又赤熱シ^{ハレ}膿タル所ヨリカキ針シテ血ヲ取テ良 熱物タハコナドヲ忌ム

外治散薬 ムスヲキニフス サボン

右ノ散薬ニテ不散時ハ膿ス也 コハリニ七日三七日モトケスコトアリ 膿ニナリカタクキ者ナレハ散スコト良

又痛所ホゲテロウノ如ク成コトアリ

前ニ見エシ薬ヲ何レニテモ用イ膿ス テヤキロンモ用ユ

蜜 麦粉 是ニテムスモ良 小兒ニハ蒸薬ヲ忌ム

右色々ノ蒸薬膿セ膏薬ナド用ユレハ必膿モツモノナリ 膿和カニシテ黄色ノ膿見ユレハランセツタニテ口明ル也 口明タラハ膿ヲヲシ出ス也 上膏テヤキロン口膏見合ノ膿取膏用ユ 日々膿ヲトリ膏薬ヲ変ルナリ

小兒ナラハ乳母軽キ下シヲ用イ食物禁スルコト専ラナリ 此所ヘヲクリカンキリ用ユ 何レニテモヨク〜心ヲ付テ料スベシ

○眼薬

玉子白味 一ツ ロスワアトル^{少シ} アロミイニス^少

右玉子ヲ能々交ロウスワアトル アロミイニス入交合 置毛メン四重ニ折リ右ノ薬ニ浸シ眼ニ貼シ卷毛メン一日兩度カエル

又 イノントノ水^{四錢} ロウスワアトル^{二錢} アルヒイ^{少シ}

右交合度々洗フ

右 二方主治風毒上逆赤目眼痛或星アリ 其外一切ノ眼病ニ用テ功アリ

○カキ薬ノ方

メラ ヲリハアノム 各六錢 真砂 二錢

右何レモ細末シテーツマミ宛香爐ニ入火ヲカケシヨウゴヲ鼻ニ當テカグ也

主治第一上部ノ腫物ヲ治 梅毒類鼻腐リ其外ノ諸腫物膏薬ヲ貼スレドモ無功者ニ是仕掛良 コトノ外是カキ薬ニテメンケンスル也 少モ無驚必ス他薬ヲ用コトナカレ □モ施セントスルモノ也 氣□ハ少モナキモノ也 用様一昼夜ニ二三度位病人虚弱ヲ見合用ユヘシ 性弱人ニハ不施用軽ク不可用 謹テ可用 又灸ニ灸灸ヲ箸ノ如クニシテ火ヲ付カキテモ良

○紅毛ニテ諸腫物膿サヘモテハ エツテルケスエ、レント云 一名 アプセシユス

諸腫物蒸薬ニ用ル薬品

蜂蜜 諸獸ノ油 白百合油 菊油 ニンニク ヒトモシ根 熟灰ニ入レテ 葵根 ソラアネム 胡广仁

唐柿実 枯芦巴 小麦 大麦 サフラン

テレメンテイナ 右何モ蒸薬ニ加入シテ用テ良

○葵根 野菊 各一握 胡广仁 枯芦巴 各十六錢

甘酒 十六錢 松脂枚脂玉子ノ黄ニテ煉リ八錢

右何レモ微火ニテトロリナル程ニ煉リ蒸ス也

又方 甘酒 二十四錢 蜜 八錢 サホン 四錢

右白百合ノ油ニテネリタテ温メムス也

○又方 蜜膏 蜜^{三十二錢} 水少シ入 微火ニテ煉菊油^少 大麦粉^少 又胡广仁粉^少ヲ入鍊ツメ蒸ス也 右ノムシ薬ニテ上リタラハ テヤキロンカ又右ノ蜜膏カヲ貼ス 又口切膏カヲ貼ス

○ラアビスカウケステーコス 口切膏也

右拵様何レノ木ノ灰ニテモ強クアク有 灰ヲ取アク桶ニ入熱湯ヲ入アク四五斗モコシラヘ置其アクヲ鉄鍋ニテ煉リ結シテインクエントムノ如ク成トキヘラニテ右膏ノ如クナルヲ石ニスリ付ヲキ乾キタル時小刀ニテ十文字ニ切りフラスコニ入息ノ出ヌ様ニシテヲキ入 時分ニ取りタシ付ル 第一口傳ノ口切也 可□也

インクエントムノテリイトム

金蜜陀僧^{四十八錢} ヲ、リヨムロサアロム 酢

右蜜陀ヲ乳鉢ニテ能々スリ右インクエントムノハリヲ以テ油ヲ入能々スリ又酢ヲ見合ニ入能スリ右ノ如ク三味カハル〜ニ入インクエントムニスリ立用ユ

主治表ノ痛小瘡ヲ乾シ皮ヲ生ス 諸腫愈カタニ

用 又フツト頭ナト腫タルニ用 頭痛ニ塗テ能
頭痛ヲ治シ和ク（「終」の字がないことから、お
そらく途中で終わったと考えられる。）

（裏表紙）

まとめと考察

本書に書かれた病名は次のとおりである。

- 一 痔
- 二 木や竹などのとげ
- 三 良性および悪性腫瘍（乳癌，陰囊腫瘍等を含む）
- 四 ハロテロウズ 一名 エレイシヘテス（血腫）
- 五 眼病等

これらの病気の病状，可能な病因，内治である薬物療法や外科治療法が書かれている。

合田大介はもう一編の和蘭医学書を残している。題して『紅毛醫術聞書』⁸⁾という。これは本人一人の名で書かれている。その中に乳癌の記述があり，長与健夫は此の書の一部を翻刻し，合田大介の「カンケル論」として述べられている^{9,10)}。また，この仕事は，その後永富独嘯庵を通じて，華岡青洲の外科手術に影響を与えたとされる。しかし，これらの仕事は歴史の中に埋もれていた。その原因は，一子相伝というが，近親者のみに伝えていく事以外許されなかったという伝統があると考えられる。ことに南蛮流外科の影響を受けたと思われる。さらに間違った情報を与えることで，誤用されれば，生死にかかわるという特殊事情もあった。

次に本書の原典は何であるかということについて，考察する。

そのヒントとなるのは原文中の唯一の図であるT字帯である（図1）。

このような繃帯は当時の日本にはないと考えられる。原書があり，その図を写したと考えた。そこで成秀館所蔵の和蘭蔵書で可能な本を推定した。ここでは「ヘーステル」と書かれている外

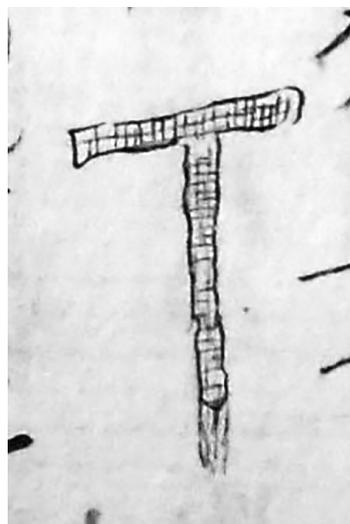


図1

科書である¹²⁾。ローレンツ ハイステル（1683～1758）¹²⁾は当時のヨーロッパでは著名な外科医であり，その著作の*Institutiones Chirurgicae*（「外科学教程」と訳す）で原本はドイツ語であるが，フランス，イタリア，ラテン，イギリス，オランダ語に訳され出版されたことでもよく知られている。この「外科学教程」中の，図1の一部を次に示す（図2）。

この中のhと書かれた図がT字帯である。

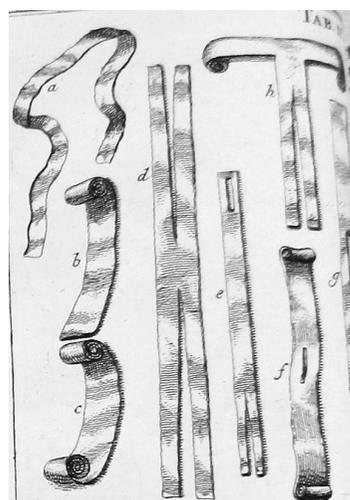


図2

長崎大学図書館医学部分館所蔵本の写真

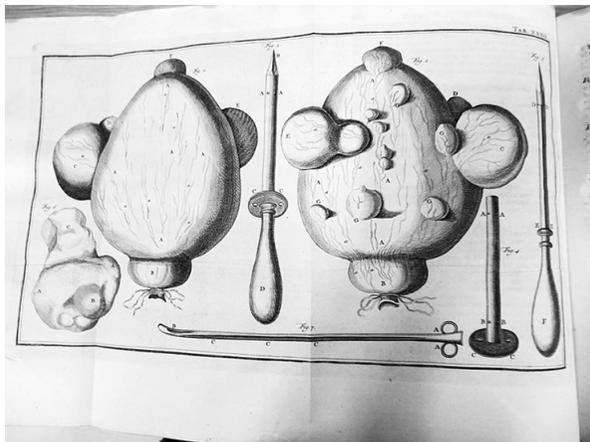


図3

長崎大学図書館医学部分館所蔵本の写真

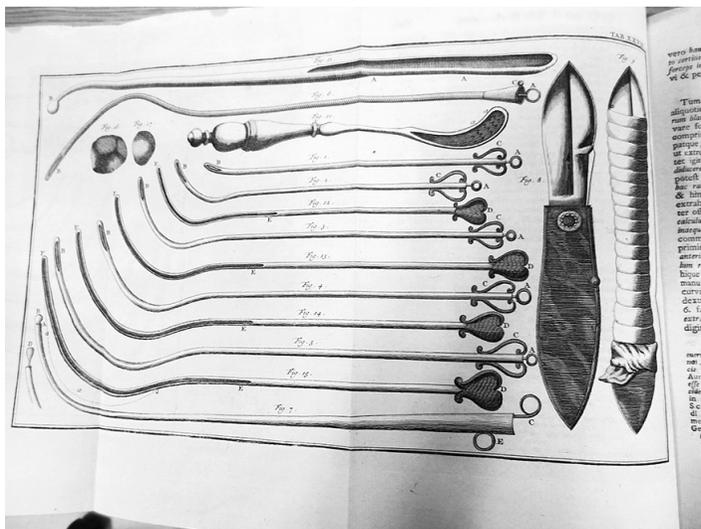


図4

長崎大学図書館医学部分館所蔵本の写真

次に、「スホイト (スポイト)」「ランセツタ (ランセット)」という道具が数か所で使われている。これは、やはり前掲の「外科学教程」中に出てくる。

本論文の『紅毛外科聞書』が書かれた時代より、数十年後に『瘍醫新書』¹³⁾が発刊される。関連する部分をリストアップする。参考にされたい。

題目に関して

尻臀部手術

キリストレーン
注肛導泄法 第一百五十九

肛門坐薬 第一百六十

放開肛門閉塞法 第一百六十一

直腸脱出 第一百六十二 脱肛

尻臀腫發 塊腫鶏冠痔無花果及海綿様痔等諸名數種治法
第一百六十三

痔疾大下血 第一百六十四

暗痔 第一百六十五

痔漏 第一百六十六

第四 腫瘍部

腫瘍総論 第一

外象焮傷総論 第二

消散方法

膿瘍 第三

乳房焮腫瘍 第四

囊睾焮腫瘍 第五

第貳部 序領

手術類 第一 人身諸部以手術施治者類聚取此部

刺絡総論 第一

肘中刺絡 第二

手腕刺絡 第三

足跗刺絡 第四

額角刺絡 第五

T字帯に関して

是ハ細長ヲ為スノ創痍ニハ縫法ヲ用ル時創口封布片ハ其下方ヲ兩裂ス 其横片ノ正中ニ縫ヒ着ケタリ 此レハ尻臂諸患或其部分ニ手術ヲ施シタル後或股縫ノ際ノ患或隠處等其症ニ應スルノ諸方法及按定巾等ヲ施セル者ヲ保持セシムルノ用ヲ為ス其用法先ツ横片ハ上邊ノ體ヲ廻シテ卷キ止メ下端兩裂ヲ為スノ所ヲ兩股間ニ垂レ下シ其部分ノ體ヲ廻シテ緊々ニ紮住ス 其帯ノ形全クT字形ノ如シ故ニT状帯ト名ツクルナリ 又其分裂兩端下邊ニ亦同様ニ製ヲ加ヘテ用ニ施す者アリ 是ヲT字形複帯ト名ツク

さらに、刺絡（瀉血）に関しても数か所治療法として述べられている。これは『八刺精要』として、『外科学教程』の訳本として、出版された。附録2として翻刻を行ったので巻末を参照されたい（本文では蛭を使う特別な方法や一般的な瀉血が出てくる）。

なお、これだけの根拠でハイステルの著作によるということが証明できるかという疑問がでてくる。更なる解析が必要であると同時に、ご意見、

ご批判を頂ければ幸甚である。ただ、大介の兄である合田 強が著した講義録の多くの図はハイステルを写しており、現在、論文作成中である¹⁴⁾。

謝 辞

ローレンツ ハイステルの *Institutiones Chirurgicae* の図版の使用を許可して頂いた長崎大学図書館医学部分館に厚くお礼申し上げます。

参考文献および語の解説

- 1) 香川県立ミュージアム (〒760-0030 香川県高松市玉藻町5番5号) 所蔵 合田慶介資料 資料番号 31号 (以下号数とタイトルのみ) 『紅毛醫術聞書』
- 2) 54号『蘭齊先生行状』
- 3) 富士川游『温恭合田求吾先生』中外医事新報 1239号 1~9頁 1936年(昭和十一)を基に合田強の略歴をまとめた。
讃岐国豊田郡和田浜生まれ(現香川県観音寺市)。父は合田傳右衛門 吉盤。弟は合田大介(蘭齊)。名は強、字は千之、通称求吾、温恭、号は巨鼈、鼈山。幼少の時、合田又玄、高橋柳哲について医を修め、宝暦二年(1752)二月京にて松原一閑斎に医と儒を学んだ。宝暦六年(1756)江戸にて望月三英につき、後に京都で山脇東洋、吉益東洞等に師事した。その後、長崎にて吉雄耕牛・吉雄蘆風に学んだ後、宝暦十二年(1762)四月長崎より讃岐へ帰る途中の南肥後で永富独嘯庵・亀井南冥に出会い、二人に長崎に遊学を勧める。墓は香川県観音寺市豊浜町和田浜。
- 4) 板野俊文, 田中健二 合田強の『西洋医述 巻三』の解題と翻刻 日本医史学雑誌 第62巻第1号 92~75頁 2016年(平成二十八)
- 5) 板野俊文, 田中健二 合田強の『西洋医述 巻四』の解題と翻刻 日本医史学雑誌 第63巻第1号 146~133頁 2017年(平成二十八)
- 6) 片桐一男『江戸の蘭方医学事始 阿蘭陀通詞・吉雄幸左衛門 耕牛』丸善ライブラリー 2000年(平成十二) 231~240頁
右文献から吉雄耕牛の略歴をまとめた。
享保九年(1724)生 長崎 寛政十二年(1800)死 長崎
江戸時代中期の蘭方医。吉雄流外科の開祖。初め定次郎、次いで幸左衛門、のちに幸作、幸載と称す。諱は永章、号が耕牛、養浩斎、成秀館ともいう。長崎の通詞吉雄藤三郎の長男に生れ、少年時代からオランダ商館に出入りして、寛保二年(1742)、一九歳で小通詞、寛延一年(1748)には大通詞となった。
- 7) 吉雄作次郎(永純) 享保十年(1725)生まれる。安永六年(1777)死亡 五十三歳

江戸中期の阿蘭陀通詞。諱は永純。阿蘭陀通詞吉雄藤三郎の子で幸左衛門の弟。別家をたてる。寛保二年(1742)稽古通詞、宝暦八年(1758)小通詞末席、明和三年(1766)小通詞並、同八年小通詞助役となる。安永六年十月四日歿。明和八年九月に「由緒書」を提出している。子は左七郎。(片桐一男) 洋学史事典 日蘭学会編 昭和五十九年 雄松出版

8) 「合田大介の『紅毛醫術聞書』の解題と翻刻」板野俊文 日本医史学雑誌 第64巻第4号 417~441頁 2018年(平成三十)

9) 長与健夫「『紅毛医術聞書』にみる合田大介のキャンセル論」日本医史学雑誌 41巻3号 395~401頁 1995年(平成七)

10) 胡光『紅毛医術の伝播と長崎一合田求吾・大介兄弟の足跡を通して』26~48頁 中村質編『開国と近代化』吉川弘文館 発刊 1997年

11) 文献6の108~103頁を参考にすると、

吉雄耕牛の門人で編者の百百海鵬が『因夜発備』の「標語」のなかで、吉雄塾で知る事ができるオランダ語の医学書を紹介している。原文では難解な漢字表記で列記している。当時の、蘭学者間における習慣に従い、その著者名で呼んだり、署名の一部分で呼称したりしている。ここでは、片桐一男の著書に従い、読みだけを記す。

1, ホイスハウデレイキ 2, ボイセン 3, シカット
カーメル 4, マトローゼン 5, レイゲルシキデ 6,
バダアールト 7, ドドネウス 8, プカン 9, ヘー
ステル 10, ブランカー 11, リス 12, アールドゲ

ワッセン 13, ウルツヒング 14, タウマス 15, アポ
テーキ 16, ゲソンドシカアド 17, バルベツテ 18,
ベルウンバトン 19, フンダメント 20, メデレイキ
このなかで、外科学に関係すると思われる原書は、
9, ヘーステルである。

12) ローレンツ ハイステル (1683~1758)

1683年9月19日に、フランクフルト アム マイン
に生まれる。ギーゼン大学、ライン大学で、ルイシュ、
アルピヌス、プールハーヴェーらについて、医学を
学ぶ。英蘭戦争に軍医として従軍し、多くの経験を
積む。1708年ハイデルベルグ大学を卒業後、ルイシュ
の推薦で和蘭軍の医長となる。1710年イギリスに遊
学、同年アルトドルフ大学の解剖学、植物学の教授、
1720年ヘルムシュタット大学の外科学教授に招かれ、
1730年には植物学教授も兼ねた。1756年4月18日ヘ
ルムシュタットで没した。

ハイスターには、多数の著書があるが、その中で
も、よく知られているものは、次の三種である。

Compendium anatomicum, initially published in 1721,
「解剖学便覧」と訳す。

Chirurgie, initially published in 1731, 「外科学」と訳す。

Institutiones Chirurgicae, 1749, 「外科学教理」と訳す。

John Stewart, Canadian Medical Association Journal,
20(4), 418-419, 1929を参考に作成した。

13) 『瘍醫新書』慶應義塾メディアセンター(富士川游
文庫) KEIO-00640を翻刻した。

14) 合田 強の『西洋醫述 卷三』に書かれた図の原典
からわかった事 板野俊文, 田中健二(投稿中)

附録1

本論文では、多くの膏薬や油薬や水薬が引用されている。これらの理解するため、吉雄永純譯として、現在、日本各所に残されている『阿蘭陀流水薬』を翻刻、編集したものを、以下に示す。

(早稲田大学 洋学文庫 8 f0014)

阿蘭陀流水薬

同 膏薬練薬

紅毛流油水薬之書

崎陽 吉雄永純 譯

(本写本を翻刻し読みやすいように、アイウエオ順に並び換えた。なお、この内容に関しては多くの写本が残っているが、より多くの薬物名が記載されているより新しい時代のものを選んだ)

ア行

ア、クワカルシス 石灰水
 ア、クワコメニス 熱湯ノ醒メタルヲ云
 ア、クワロザアシイ 茨露
 ア、クワプランタギイス 車前草露
 アクシユンキヤポルシイ (又はアクシユンキヤホルシイ) プタ油
 アセイン (又はアセイチホルチイ) 酢
 アネイチイ 小茴香
 アルエス 白丹凡
 アルギイニス (又はアルキイニ, アルキイニス)
 緑青
 アルチンテイヒイへ 水銀
 アルヒイヲ、ヒイ 卵ノ白味
 アロエス 蘆會
 アロミイニスコロテイイ 明誉
 アロミニスコリエデウ 古凡
 アンフル 軽粉
 ウエイン 葡萄酒
 ウエットウエイン 白葡萄酒
 エンブラースト 方書終

カ行

カムブルフーリイ 忍冬汁

カモメリイ 野菊
 カルタモウシイ 宿砂
 カロミイニス 枯誉
 カンフル 樟腦
 キユルキウマ ウコン
 コルホウニヤ 松脂
 コルラウタル 丹誉
 コムテレピンテイナ 杉脂
 コムレシイナ リンロク
 コム 杉脂
 コムタクミス 枳油
 コルテキサムフーシイ ニワトコ皮油
 ゴムゼネーフル モロダ脂
 コロウシイ 紅花
 コロンヒイユステイ 鋤焼返

サ行

サボウネスヘネタア サボン
 サボネスヘネタ 石鹼
 サンキスダラコウネス キリン血
 シレヘータア 舟虫
 シユクシニイ 琥珀
 シスクスカンフリイホウリム 忍冬汁
 シユクスヘトーニカ イヌゴマ
 シユクリスプランタキユス 車前汁
 スイシヌムスカアト 肉豆蔻
 スターラクスリクイダ フロウス (スタアラクスリタイタ) 蘇合油
 スヒイテスヒイニイ 焼酒
 スワーツル 硫黄
 セイカツト 烏賊甲
 セイメンアメイチヤ (セイメンコミシイニイ)
 小茴香
 セイメンヘエロカラシイ 麻仁
 セイメンリイニイ エゴマ 又は 荏
 セイメンリラアネム 竜葵
 セラアルハア (又はセラアルバア) 白蠟
 セラシテリイナ (又はセラシデリーナ) 黄蠟
 セリウサ (セルウザ) 唐土

セリトウネムマスエコ (テウルキウス) 鬱金

夕行

タラアネス 狸油
テレメンテイン 枳脂
テレメンテイナ 代杉脂

ナ行

ナアノケル 丁子
ヌイシヌムスカアト 肉豆蔻

ハ行

ハツカテウリイニイ 肉桂
ハツカラウリイニイ 黒ヅ、ノ実
ハルホウテイ 大麦粉
ヒイシスナアハレム チヤン 審瀝青
ヒツテルヨウルアルビイ 白丹膏
フレキマアテヒツテリヨウリイ 丹凡
フロレスエヘレシイ (又はフロレスエペレシイ)

乙切草

フロレスカモメリイ 野菊花
フロレスロサアロム (又はフロレスロサアシイ
ヲ) 薔薇花
フロレスリレヨウロム 白百合花
フロンヒイユステ (又はフロンヒイユステイ)

鉛焼返

ペトーニカ イヌゴマ
ヘリフスロサアシイ 茨花散
ホウレスアルメニヤ 赤石脂
ホウリヤーエンフロレスマテリカアリヤ 小菊
葉

マ行

マクニイテス ジシヤク
マステキス 玉乳香
ミイニイ (モイニイ) 丹
メラ 没薬
メリロサアロム 茨蜜
メリクス (メルリス) 蜜

ラ行

ラアテキス 根
ラアテキスアルテイイヤ アライ根
ラアテキスイリアテス フロウレンシイ 川葛蒲
ノ根
ラアテキスシキルラア クイスマレノ根
ラアヒスカナメナアリス カンズイ石
ラウイウエン 赤葡萄酒
ラウリイニン 黒ヅ、ノ実 和名藪肉類ト云木ノ
実也 代リニ楠ノ実ヲ用
リウ (又はリウタ) 芸香草
リツタゲイリイアウリイ (又はリツタゲイリイ)
金炉粕
リンフリコウリヨム 蚯蚓
レシイナピニイ 松脂
レシイナ (レシイナヒイニイ) 薑陸
ロサアロム 薔薇花
ロウウエン 赤葡萄酒

ワ行

ヲ、リラアヒス 青蛙油
ヲ、リヨムアネイチ 小茴香油
ヲ、リヨムイソラアネム 龍葵油
ヲ、リヨムエペレシイ 乙切草油
ヲ、リヨムカモメリイ 野菊花油
ヲ、リヨム、カキスム ムカキノ油 (又は合湯)
ヲ、リヨムコミニス (又はヲ、リヨムコメニス、
ヲ、リヨムヲリハアレム, ヲ、リヨムミニイ
ス) 广油, 胡麻油, 胡广油
ヲ、リヨムロサアロム 薔薇花油
ヲ、リヨムレリヨウロム 白百合油
ヲ、リヨムヲリハアスム 乳香油
ヲ、リヨムテネチイ 茴香油
ヲリハアスム (又はヲリバアスム) 乳香
ヲ、ヒイ 鶏卵

紅毛油水薬之書 終

崎陽 吉雄永純 譯

弘化二年乙巳孟夏調之 (一八四五年) 恬齋蔵書

附録2

本論文では、一般的な取血法や蛭を使う特別な瀉血法や出てくる。これはローレンツ ハイステルの『外科学教典』にでてくる。特に蛭を使う瀉血法は、稀であるので、以下に翻刻し参考とした。

(慶應義塾大学医学部 蔵書 富士川游文庫の内、KEIOU-00224, 管理番号 70100587402)

増譯八刺精要 卷中

磐水 大槻茂質 翻譯

奥州 佐々木知芳 仲澤 増譯

長州 烏田通奂 智的 參校

蛭鍼法

水蛭ハ水中ニ生育スル一種ノ蟲屬ナリ コレヲ取テ身體ニ貼スレバ直ニ鬻テソノ處ノ絡ヨリ血ヲスヒ速ニ疾患ヲ免レシム 名ツケテ蛭鍼法ト云フ 厄利亞及ビ邏瑪ゲリア邏瑪ローマハ意太利亞ノ都府人ハ古ヨリ此法ヲ施用ス 其蛭ヒル即チ水蛭ナリニ數種アリ 此法ニ用フルニハ流河清水ノ中ニ生スル者ヲヨシトス 溝吠池潢及ビ湖水ノ中ニ産スルモノヲ用フベカラズ 多クハ毒アリ 若シコレヲ用フレバ焮熱腫痛ヲ發スルコトアリ コレヲ撰ブニ其頭尖細ニ背上綠色ノ條紋アリテ其腹黃赤色ノモノヲヨシトス 其頭肥大ニシテ青色ノ條文アル者必ス毒アリ 用フベカラズ 是レ外科術ニ精ナル者ノ經驗スル所ナリ 又新タニ取ル者ヲ用フルコトナカレ 多クハ毒アリ 先ツ硝子ビードロノハチ盂ニ清水ヲ盛り其中ニ畜フコト一二日其毒ヲ吐キ盡サシメテ後更ニ新汲水ノ中ニ蓄フコト數月ニシテ其用ニ供スベシ

右第一章水蛭ヲ撰ビ蓄ルヲ論ズ

是ヲ行ント欲スルトキ蛭ヲ水中ヨリ取り出し先乾キタル盆子或ハ硝子器ノ中ニ入レ置クコト一時許斯ノ如クスレバ蛭渴シテ嚙齧ミ易ク且能ク血ヲスフナリ 顚顚及ビ耳後ニ施セバ多血ニ因テ到ス所ノ諸般ノ眼疾及ビ頭病ニ効アリ 直腸ノ絡ニ施セバ腸直腸ニ行ル絡ヲ閉塞ヲ開達シ内痔ノ痛ヲ軟和ス 癩脉ノ閉塞ニ因テ勅血吐血嘔血等ヲ發スル者ニハコレヲ癩脉ニ施セバ能ク血ヲ此ニ誘導シ少時

ニシテソノ血ノ上涌ヲ止ム 甚ダ効アリ 按ニ前臍臑曰ク肝癰及ビ總テ肝脾ニ因スル諸病ニ癩脉ヲ刺シテ血ヲ瀉スルヲヨシトス 若シ人ニヨリ定式ノ刺法ヲ施スベカラザル者ハ温メタル牛乳ヲ以テ其肛門ヲヨク蒸サシメ後水蛭六箇ヲ取テコレを着ケ血ヲ吸ハシムベシ 水蛭血ヲ吸ヒ自ラ脱スルヲ待テ壺ニ小孔ヲ穿テタル蓋ヲ掩ヒ患者ヲシテ肛門ヲ其孔上ニ當テ繕セシムベシ 湯氣拂蒸シテ血ヨク出ルナリ 此法又股内諸病ノ諸病ニ施シテ功アリ コレヲ施スニ先其施サント欲スル處ヲ撫摩シテ熱セシメ乃チ綿布ノ零餘ヲ用ヒテ蛭ノ背ヲ撮ンデ貼スベシ 否ザレバ撮ミカタシ 又硝子筒ロヲ附著スレバ直ニ鬻ミツキ蛭身血滿テフクレ膨脹スルニ至ル 其筒ハロヲ狭小ニシテ蛭ノ却行スルコト能ハザルモノヲ用フベシ 數處ニコレヲ施サント欲セバ毎ニ此法ニ依テ行フベシ 然レドモ若シ蛭齧ミ著ザレバ温湯ヲ其部ニ塗ルベシ 又鳩血或ハ鷄血ヲ塗ルモヨシ 右ノ法ヲ施シ猶齧著ザレバ他ノ蛭ニ換フベシ 是故ニ蛭鍼法ヲ行ハント欲セバ預ノ多ク蛭ヲ畜ヘ備フルヲ要トス 其齧ミ著ザルニ臨テ直ニ換ヘ用フベキガ為ナリ 此法ヨク眼目ノ焮腫痛ヲ治ス 涙機キリール力兒ニ發スル者ニハ内皆ニ施シテ殊効アリ

右第二章蛭鍼用法並ニ施スベキ部位ヲ論ス

蛭已ニ血ヲ吸フテ腹中ニ滿レバ多クハ目カラ落ツ 爾後其候仍ヲ血ヲ瀉スルニ宜シキカ又ハ(マモ)内科今少シ吸ハシメテ効アルベシトイハバ再び其部ニ施スベシ 若シ其蛭自ラ落ズンバ乃チ剪刀ヲ以テ其尾ヲ斷スベシ 蛭猶吸フテ止マズ 血斷口ヨリ滴々トシテ出ツ 血量ノ足ルマデ除キ去ルコトナカレ 然レドモ其尾ヲ斷スレバ蛭ハ死スルモノナリ 若シ蛭自ラ落ストモ強テコレヲ除キ去ルコトナカレ 因テ焮熱腫痛ヲ發スレバナリ 若シ除キ去ラント欲スレバ灰或ハ鹽少許リヲ取テ其背上ニフリカケ摻レバ自ラ落テ焮熱腫痛ヲ發スル患ナシ 又コレヲ新汲水ノ中ニ蓄ヒ再び用ニ備フベシ 又落テ後其跡ヲ温酒或ハ温湯ヲ用ヒ洗浄シ愈創膏ヲ貼スレバ即チ愈ニ多クハ膏葉ヲ用フルニモ及バズシテ愈ルモノナリ

右第三章術ヲ施ス間採息スベキコトヲ論ス